

# モチーフづくりの性差と年齢差についての研究（表現・ダンスの分野から）

小 倉 美 津 子

## 1. は じ め に

舞踊・ダンス、表現などそのジャンルを総称し、パフォーミング・アートから創作する舞踊までの分野を学校教育に位置づけられてきたのが、現在の学習指導要領というダンスの分野である。

この分野は、小学校の低学年をのぞき女子生徒のみの学習内容として展開されてきたが、最近になって男女共修の分野として取り扱うようにとの意見が強くなってきている。具体的には、昭和61年10月に教育課程審議会がまとめた「教育課程の基準に関する基本方向について」の中間まとめの中で、格技（柔道・剣道）とともにダンスについても男女の区分なく、共修できる道を開くよう求めていることがあげられる。このことは、江刺氏他の多くの研究が明らかにしているように、創造性の開発や自己表現力の陶冶に大きな成果が期待できる分野であるとされていることに起因しているであろう。

舞踊やダンスが、パフォーミング・アートすなわち演技する芸術ととらえ、その演技をする技術いいかえれば表現技術のみが舞踊でありダンスであるとの認識にたった時、学校教育課程では男子には不必要な分野であるにとらえられたことは事実である。また、この思想はわが国においては特に顕著であったことも事実である。極端な言い方をすれば、舞踊やダンスは技術性がすべてであり、新しい踊りをつくることは論外であるとされ、ただ上手に踊ることだけが求められたと言っても過言ではなかった。しかし、従前から技術性が中心ではあるが、その中でも創造性を求めてきた経過がある。それを個性とみたり、流

とみたり、巧拙とみたりしてきたのである。それは、一定の形式がつくりあげられている舞踊やダンスの範囲内で、一部の創造的な動きや、表現にとどまっていたが故の判断であったからだともいえる。このことは、日本舞踊や西洋の宮廷舞踊、フォーク・ダンスや郷土舞踊などにも、踊り手によってそれぞれの創造性が生かされていたことで証明できる。この端的な例を有名な徳島県の阿波おどりにみることができる。しかし、これらにみられる創造性は、未だ個の発想や感性の表現、ひいては人間性そのものの表現には至っていない。それは、先にも述べたように、一定の形式（表現意図や伴奏音楽など）の中での創造的表現であり、踊りそのものを創作するまでには至っていないことをものがたっている。

一方、舞踊とダンスの概念は、運動的、感情的、感官的などの視点からみて、必ずしも一致するものではなく、また全く異質のものでもないともいえるが、近年はこれを広義にとらえ、モダン・ダンス (Modern Dance) すなわち創作舞踊として、これを認識している分野がある。このように、舞踊やダンスにおける創造性を大切にするようになってきた。言いかえると「舞踊やダンスは創作されるもの」という原点を重視するようになってきたといえる。

このことを大切に、この創造的運動を体育の一分野として昇華させたのが、学校体育の一領域として位置づけたダンスである。このように、学校体育に位置づけたダンスを、小学校学習指導要領でみると、遊戯（形式はダンス）（昭22）、リズム運動（昭33）、ダンス（昭43）、模倣の運動・表現運動（昭53）と変遷してきている。

これらのことから、学校体育でいうダンスは「感性、感情を身体活動によって表現するとともに、体感的快感を得る。」領域と定義することができる。

そこで今回は、このダンスを本学の教育学科の学生がどのように見ているか、また考えているかを調査、分析するとともに、これらの学生の見方・考え方と、別途に調査した児童・生徒の見方・考え方と対比しながら、ダンスに対する基礎的な認識と創作ダンス化するためのモチーフの描き方、フレーズの構成の仕方などの相異について調査・分析したので報告する。

## 2. 対象と調査結果

## (1) 調査対象

調査対象は、模倣運動として学習している小学校2年生（男女各100名）、表現運動として学習している小学校5年生（男女各100名）ダンスとして学習している中学校2年生（女100名）、学習していない中学校2年生（男100名）、ダンスとして学習している高校2年生（女100名）、学習していない高校2年生（男100名）、及び表現として学習している大学生（男75名と女80名）を対象とした。調査の方法は、質問紙法とし、昭和62年4月～9月にかけて、それぞれの授業時間に記述させた。なお、学習していない男子の児童・生徒については、もし学習するとしたらとの仮想で答えさせた。

## (2) 調査結果

まずダンス領域の学習をどのように思っているかの設問に対し、表1のように答えている。なお、好き嫌いの理由を聞いた設問のうち好きな理由について、男子の大部分が無解答であった。しかし、一部の生徒・学生には、表現や表情を豊かにしたい、立居ふるまいをカッコよくしたいなど、ダンス領域の学習を通して修得したい要素についての希望をあげているものはあった。女子については、どの対象学年もダンスを好きな領域の上位にあげており、その好きな理由を表2に示す通りはっきりと答えている。なお、表1以降の各表に示しているものは、すべて解答されたものの上位の3つをあげている。

表(1) ダンス領域の好嫌度合い

		小 2		小 5		中 2		高 2		大 学 生	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
好 嫌	一番好き	ボール	ボール	ボール	ボール	球技	ボール	球技	球技	ボール	ボール
	ダンス (表現)	3位	2位	6位	2位	6位	3位	6位	2位	6位	3位
	一番嫌い	陸上	器械	ダンス	器械	ダンス	陸上	ダンス	陸上	ダンス	器械

注 表現・ダンスについては踊るのは好きだ。しかし創ることが面倒とか、創り方がよくわからない、といった指導上に問題があり、その理由を除けば楽しい、と付けくわえている。

表(2) 女子のダンスが好きな理由

小 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. おもしろい</li> <li>2. そんな気持ちになれる</li> <li>3. 頑張ってやれる</li> </ol>
小 5	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. みんなが一緒になれる</li> <li>2. みんなと考えるのが楽しい</li> <li>3. 他の領域よりは楽しい</li> </ol>
中 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. モティーフづくりが楽しい</li> <li>2. みんなが一緒にやれる</li> <li>3. 女性らしくていい</li> </ol>
高 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. モティーフ・フレーズづくりが楽しい</li> <li>2. 練習課程で真剣になれる</li> <li>3. 表現が豊かになると思う</li> </ol>
大 学 生	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 創造する過程がよい</li> <li>2. 感性の違いがよくわかる</li> <li>3. 運動量が適当である</li> </ol>

表(3) 嫌 い な 理 由

	男 子	女 子
小 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はずかしい</li> <li>2. おもしろくない</li> <li>3. むづかしい</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はずかしい</li> <li>2. むづかしい</li> <li>3. みんなまねになる</li> </ol>
小 5	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はずかしい</li> <li>2. 何をしたらよいかわからない</li> <li>3. 人に見られるのがいや</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. よいのか悪いのかわからない</li> <li>2. 動き(表現)がわからない</li> <li>3. 一部の人の意見通りになる</li> </ol>
中 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 何をするのかかわからない</li> <li>2. はずかしい</li> <li>3. 女の種目だと思う</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. モティーフが表現と結びつかない</li> <li>2. 一部の人の意見通りになる</li> <li>3. 意味がわからない</li> </ol>
高 2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はずかしい</li> <li>2. 女の種目だ</li> <li>3. 何の効果もないと思う</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 評価基準がわからない</li> <li>2. モティーフ・フレーズともに納得できるものがない</li> <li>3. 運動量が少なくなる</li> </ol>
大 学 生	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 納得できる基準がない</li> <li>2. 指導者で変わるものと思う</li> <li>3. てれくさい</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 納得できる基準がない</li> <li>2. 運動能力の差が気になる</li> <li>3. 表現能力がない, 限界を感じる</li> </ol>

表(4) 対象別の題材の選択一覧

		模 倣		身 近 な 現 象		
		動 物	植 物	スポーツ	自然現象	感 情
小	男	ペンギン 象 熊	タンポポ 大木 チューリップ	野球 バレーボール サッカー	夕だち 台風 咲いた花	いかり(けんか) くやし かなし
	2 女	ねこ 犬 熊	チューリップ タンポポ サクラ	バレーボール ハードル 体操	咲いた花 雨ふり 満月	くやし かなし 楽し
小	男	馬 犬 蛇	チューリップ タンポポ 日まわり	野球 サッカー バレーボール	嵐 風 雨	いかり くやし にくらし
	5 女	犬 猫 さる	チューリップ ゆり 日まわり	バレーボール 体操 ダンス	虹 そよ風 暑い日	かなし 楽し くやし
中	男	魚 キン 象	サクラ 日まわり チューリップ	野球 サッカー バレーボール	台風 波 大雨	にくらし やさし くやし
	2 女	犬 さる 魚	チューリップ ゆり 雑草	ダンス 体操 バレーボール	そよ風 日射し 月	くやし かなし おもしろい
高	男	犬 馬 チンパンジー	大木 雑草 日まわり	野球 ラグビー サッカー	強い日射し 台風 洪水	おもしろくない おもしろい くやし
	2 女	犬 猫 ねずみ	タンポポ チューリップ 月下美人	バレーボール テニス 体操	そよ風 日射し 月	やさし くやし せつな
大 学 生	男	象 トカゲ さる	タンポポ チューリップ 日まわり	野球 ゴルフ ラグビー	雨 波 風	せつな くやし いかり
	女	猫 ねずみ 小鳥	タンポポ サクラ 朝顔	テニス 体操 水泳	そよ風 水滴 雲	かなし くやし よろこび

表(5) 題材(分野)の選択

	題 材	
	男	女
小 2	タ ン ポ ボ 野            球 バレーボール	チューリップ タ ン ポ ボ バレーボール
小 5	野            球 サ ッ カ ー い    か    り	バレーボール 犬 か な し さ
中 2	野            球 サ ッ カ ー い    か    り	ダ ン ス そ   よ   風 く や し さ
高 2	野            球 おもしろい く や し さ	テ ニ ス や さ し さ く や し さ
大 学 生	せ つ な さ く や し さ い    か    り	そ   よ   風 か な し さ く や し さ

ものである。

3点目は、自分自身が創作することを念頭において、その場合の題材をどの分野にするかについての設問をした。その結果は、表5に示す通りである。なお、中学生以上については、主題を「海」とした題材を与え、各自が「海」を表現する場合のイメージ構成を簡単に記述させ、その概要をまとめたものを表

表(6) 「海」を題材にしたイメージ構成

	男	女
中 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大波の打ち寄せるところ</li> <li>○荒れくるう大波</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○波打ちぎわの様子</li> <li>○水平線</li> </ul>
高 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○波をけたてる船団</li> <li>○夕日の沈む水平線</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○青い海と帆走するヨット</li> <li>○キラキラと輝く波間をぬって走るモーターボート</li> </ul>
大 学 生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○豪華客船からみた夕日</li> <li>○エメラルドの海に泳ぐ熱帯魚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○波打ちぎわでの彼との語らい</li> <li>○大波にのるサーフィン</li> </ul>

一方嫌いな理由については表3に示すとおりであるが、女子の場合は嫌いと解釈するよりは、いやな要素があると理解した方が妥当性があると思慮される。

次にモチーフの描き方について、次の2つに区分して設問して解答を求めた。

①模倣としての題材選び（動物・植物）

②身近な現象の中から題材としたい事象（スポーツ・自然現象・感情）

その結果は、表4に示す通りである。なお、小学生については、多くの例示をしてその中から選択させた

表(7) 大学生の「ダンス指導」に係る意識

男 子	理 由	女 子
指導した23い%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦展開の仕方によっては楽しく、運動量も多い</li> <li>◦自分自身のためにも取り組みたい</li> <li>◦小学生には最高の教材だと思う</li> </ul>	指導した58い%
指な導いた68く%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦学習指導のためのポイントがわからない</li> <li>◦全体が抽象的である</li> <li>◦納得のいくフレーズの構成ができない</li> </ul>	指な導いた21く%
わからな9い%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦全容がつかめない</li> <li>◦抽象的で評価に自信がない</li> <li>◦楽しい教材とは思わない</li> </ul>	わからな21い%

6に示した。

また、大学生に対しては、ダンス（表現）を指導する場合の取り組み姿勢について質問をし、そのような考え方になる理由についてもあわせて質問した。その結果は表7に示す通りである。

### 3. 考察とまとめ

#### (1) 考 察

体育学習の全領域の中で、ダンス（表現等）に対する好嫌度をみると、男子では小学校低学年（2年）以外ではすべて一番嫌いな領域だとしている。一方、女子では小学校低学年と高校生を除いては一番好きな領域とし、小学校低学年や高校生でも好きな領域の2番目にあげ、全体としても女子は好きな領域だといえる。その理由も、男子の場合は何を目指して学習するのが不明確であり、あわせてはずかしい運動であるとしている。これは、学習の機会に恵まれず、ダンスは女子の教材であると決めつけていると思われる面が強い。男子がもし小学校高学年以上も継続して学習していたらどのように変化するかは興味深いところである。一方女子では、学習が進むに従ってその全容を把握して

いる様子が伺える。モチーフ・フレーズづくりの創造活動に楽しさを感じ、創造—練習—発表—修得の過程が着実に積みあげられていることを示唆している。しかし一方では、男子と同様に基準となるべき学習のための指標の不明確さに困惑するとともに、団体表現での創作過程における意志疎通に課題を残しているといえる。

次に、創作ダンスに不可欠の題材の選び方については、年齢・性別に一見して変化がないように見える。しかし詳細を点検すると、小2・小5においては身のまわりのことや近々に目についたり体験したことが中心であり、中・高・大と進むに従って、表現のし易さや一つの事象でも誰もが気づく変化を備えているものをあげている。これは一般には経年化に伴う思考性の発達とも言えるが、この思考性の発達を身体表現に結びつけることがダンスの目指すところであり、ダンス指導の原点ともいえ大切にしたいものである。

次に、自由に題材を選ばせた場合の特徴をみると、小2は模倣題材が中心であり、小5になると感情に関する題材が選ばれはじめ、その傾向は中・高・大と多くなっていく。このことは表現しようとする内容に多様性と深淵さを生みだすものといえる。

そこで、先の多様性と深淵さに変化があるかどうかを、仮題「海」で検証すると、中2では海そのものの様子を描写しようとし、高2では海+ $\alpha$ となり、大学生になると海+ $\alpha$ +何かを表現しようとの意図から題材を設定しているところがみられる。しかし、男女間には差異がみられない。このように、モチーフに多様性と深淵性が生じていくことは、ダンスの学習には関係ないと言ってもよい。

モチーフの描き方に多様性と深淵性をそなえ、その面では男女間に差異のない大学生（教員志望者）が表現（ダンス）領域の指導を担当することについての希望度合いでは大きな違いをみせる。「指導したい」と積極的な姿勢では男女比が1:2.5と女性が非常に高い。が、逆に「指導したくない」と消極的な姿勢では、男女比が3.2:1と男性が極端に高い。このような結果が表われるのは、中学校・高等学校においてダンスの学習を受けていないことに起因するか、それともこのダンス領域が本質的に男性には合わないのかなど、究明の



余地は残る。

## (2) まとめ

以上考察をすすめてきたように、学校体育において表現・ダンスの領域の学習をしたかどうかは、創作ダンスの原点ともいえる頭に描くモチーフづくりには余り影響が無いと言える。

しかし、舞踊やダンスが、その創作性とパフォーミング・アート性を備えもっていることを考えるとき、ただ単純にモチーフづくりができれば創作ダンスが好きになり、いい作品が生まれ、ひいては指導力や指導意欲をもたせることにはならないとも言える。

特に創作性を重視する学校ダンスでは、身体表現としてのモチーフづくりと作品としてのフレーズの構成に、その重要な要素がある。

このため、身体表現のための基礎的なモチーフづくりを重視した指導を中心にした授業の展開が求められるところであるが、現状でもこの成果が大学生にみられる指導意欲の男女差として表われているとも言える。

今回の調査分析からみて、豊かな身体表現、美しい身体表現を求めて学習指導するダンス（表現）領域の展開は、男女の共修、小・中・高校での経年学習、そして身体表現のモチーフづくりを中心にした学習指導の大切さの一端を明らかにできた。

今後は、身体表現のモチーフづくりの修得過程を明らかにし、先述の結論の立証を進めたい。

## 参 考 文 献

- 「舞踊の美学」 邦正美（富山房）1973
- 「舞踊」 邦正美（体育の科学社）
- 「舞踊創作と舞舞演出」 邦正美（新栄堂）1986
- 「創作ダンス入門」 河原富美恵訳著（大修館）
- 「ヨースレーダー法によるダンスのトレーニング」 河原富美恵訳著（大修館）
- 「ダンス指導ハンドブック」 水谷光（大修館）1975
- 「体育科教育」1982年——6
- 「学校体育」1986年——5
- 「学校体育」1987年——10
- 「女子体育」1987年——第29巻

